

今回の座談会に参加していただいた方々からのメッセージ。

青山氏の情熱に賛同するように、この日も多くの仲間が「きたほっと」に集まった。高齢者110番の家と密接な関係にある「行方不明から安全に戻れる事を願う会」会長の三木泉氏、北海道介護福祉士会会長の小泉昭江氏、看護師を退職したばかりの三浦道子氏、㈲エーデルワイス社員の櫻井正志氏と樋口靖文氏、そして先述の伊藤大輔氏だ。様々な職業の視点から、誰もが地域の安全と発展を考え、誰もが高齢者問題に対して明確な考えを持ち、それぞれに行動している。北見市をより良くしたいとの強い思いを持つ皆さんから、メッセージをいただきました。（順不同・敬称略）

櫻井 医療も介護も、人と人との付き合いは同じです。何がどうなっても変わりません。人と人との付き合いが好きなのがたくさんこの業界に集まってきて、そこから技術を学んでいくところをすごく期待しています。実際、自分もそうなりたいと思っています。

樋口 新たに介護の世界に入る時に、どのように伝えていけばいいか、どこから入ったら良いのかなとずっと思うようになりました。新卒の高校生にどう伝えたいか、どの角度で伝えたいかを考えています。人を思いやり、話をしっかりと聞くことが大切ですね。

伊藤 IT業界からすると、生活が豊かになるIT化もありますが、未来の日本につながるためにも高齢者と子供のために投資をしていくべきですね。IT業界だけでものが成り立つわけはありません。僕はあくまで皆さんのことをサポートすることが仕事ですから、ターゲットを見極めたいですね。

三木 自分が死んでいく時には、おそらく若い人たちの力で支えられるでしょう。未来にと言ったらおかしいですけど、何とか頑張って、この仕事に就いて欲しいですね。私は自分の将来のために若い人に優しくしています（笑）。介護職に就く人は家庭の中で子供を育てる時にベストな人になるのかなと思います。

三浦 これからの学生さんに、「何もできなくていいんだよ」と伝えたいですね。何かをしなくてはいけないではなく、「何もできなくてもそばにいてあげてほしい、安心を与えられるんですよ」と、そういうことを伝えられてあげられたら、この仕事って素晴らしいと思えますから。

小泉 何らかのきっかけがあって、後押しがあれば、人はすごく変わると思います。変わるきっかけを自分たちがどこまでできるか、一人ひとりじゃできないけれど、助け合いながらできるのかなと思います。介護を目指そうとする人を含めてよりどころになってほしいです。アドバイスをくれる人が周りにたくさんいるんだよ伝えたいです。

青山 介護の素晴らしさは、お医者様やご家族と共に縁のあったその人の側で、人生の最後の章を、いかに満足し旅立たれるのか、その人生に色付けできる尊い仕事です。未来の学生さんには、すぐには介護職に就かなくても、自分が挫折をしたり、少し心に思うことがある時こそ、介護業界にチャレンジする“とき”であり自分の人生の質も高まるチャンスですよ。

探訪を終えて 左理事長の総括

「高齢者110番の家」の取り組みは、子供110番と同じく、高齢者を守る地域理解が増えるきっかけになります。高齢者や認知症の方の駆け込み寺であり、今後さらに「高齢者110番の家」のシールが地域住民に浸透し、効果を発揮することを期待しています。地域として「認知症で困っているのでは？」との介護のアンテナを張ることにつながります。青山さんのリーダーシップに周囲が巻き込まれるようにそれぞれの専門性を発揮して、相乗効果を生んでいます。青山さんは考えたらすぐ行動し、頼まれたら断れない、包み込むような性格で、みんなの「母」の要素がありました。北見だけで終わらせてしまうのはもったいない取り組みだと思います。

北海道・北見市 高齢者110番の家 地域食堂「きたほっと」



有限会社エーデルワイス

☎ 0157-33-5671

所在地 北海道北見市新生町58-17

<http://edelwaice.com>



高齢者110番の家副会長、地域食堂「きたほっと」主催

青山 由美子 Aoyama Yumiko

認知症介護指導者、有限会社エーデルワイス代表取締役



青山氏の情熱に賛同した仲間が集まる

「このサービスを自治体が介護保険を適用してくればいいのですが、せっかくなので優れたサービスを、北見市内だけで眠らせておくのはもったいないです。ぜひ高齢者110番の家と同じく、日本中に紹介して欲しいですね。青山氏は良いものは自分たちだけで終わらせるのではなく、全国に広がることを願っている。」

青山氏は力説する。「このサービスを自治体が介護保険を適用してくればいいのですが、せっかくなので優れたサービスを、北見市内だけで眠らせておくのはもったいないです。ぜひ高齢者110番の家と同じく、日本中に紹介して欲しいですね。青山氏は良いものは自分たちだけで終わらせるのではなく、全国に広がることを願っている。」

青山氏は言う。「認知症の方を見かけたら、声を掛け、名前や住所が分からなかったら警察に連絡することが常識となる町。介護保険制度が独り歩きして、何をどこに申請したらいいのか分からない人には、地域包括支援センターを紹介する優しさ。近隣地域で高齢者110番の家のアンケータを集計したところ、「ぜひとも私たちのところでも始めたい」との声が多数寄せられたという。この取り組みを広めたいと思う人は多いだろう。青山氏は「上から言われたことはなかなか広がりにくい。自分たちの地域を守るために、命を守るためにも、草の根運動のように高齢者110番の家の取り組みは続けていきます」と前を向いた。

業界に携わることになり、今では「行方不明から安全に戻れる事を願う会」の事務局長も務めている。青山氏は介護現場の視察でオランダを訪れた際にITの可能性を目の当たりにした。人材不足を補うように、IT機器でシステム管理しているデイケアやデイサービスが一般的だった。現地の人から「日本は技術が進んでいるのに、なぜしないんだ」と言われた。高齢者110番の家開設時から伊藤氏に相談していた行方不明時のGPSは、安価で、より性能の良い具体的なものを作成することができた。この経験からも今後もオランダのように、どの介護現場でも手が届く価格で作成できないものかと、これからの介護現場についても思案している。

2014年秋、伊藤氏が勤める会社がNTTドコモが開発したGPS端末を使い、居場所を特定できるサービスの提供を始めた。サイズはわずか38.5ミリメートル×45.5ミリメートル×11.85ミリメートルの「おさんぽさん」だ。小型サイズを活かした防水機能付きで、靴や衣服などに違和感なく身につけられる、認知症対策にもついているアイテムだ。現在は北見市内限定でのサービスとなっているが、介護業界のみならず、各方面から注目されている。原価ギリギリで、売れば売れば赤字で、よーと伊藤氏は苦笑する。14年8月、広島で豪雨により土砂災害が発生し74人が亡くなった惨事の際に、「おさんぽさん」の問い合わせが相次ぐなど、災害時にもその効果が期待できる。

願っている。地域を守るために草の根運動を続ける。高齢者110番の家の今後の展望として、「今は『高齢者110番の家』の出入を拡大したいと検討しています。場所を構える事は、ランニングコストもかかりますが、地域のセンター等を使い、月に1度でも集まることで安否の確認ができます。また、地域の人が自宅以外で気楽に会える場所は、グループホーム等の事業所の中でも良いわけですね。お一人住まいの方々が、朝の10時から11時30分頃までのホームの『心身活性の時間』にお越しになっても良いのではと地域の民生委員さんと進めつつあります。ここには、地域密着型のグループホームの運営推進会議の参加者2人もお手伝いをしていただけるようです。地域の人々にとっては事業所を知ることにもなり、風通しの良い運営ともなります。お金をかけなくても身近にあるものを利用し、なおかつ互いが幸せな気分になることで双方にメリットとなります。福祉を営む人等が地域を思い発信することも今からできることでもあります。志を同じくする人々、どうぞお気軽にお知らせください。微力ですが応援させていただきます」と



左から左理事長、青山氏、三木氏、小泉氏、伊藤氏、三浦氏、近藤理事、樋口氏、櫻井氏